

神里美鈴（かみざとみすず）は、娘のわかばと二人で、アパートで暮らしていた。年齢は四十三歳。三年前に病気で夫を亡くしてから女手一つで娘を育てている。昼間は小さな会社で事務員の仕事を如才なくこなし、夕方それを終えてからは一人で全ての家事を請け負い、不断の努力で見事家庭を守っていた。

多忙を極め、金銭的にも生活は苦しかったが、美鈴は文句一つ言わず、強く逞しい母親であり続けた。部活でソフトボールに熱中する娘の汚れたユニホームを毎日洗濯した。無論ただ洗濯機に放り込むだけではなく、土に汚れた部分を自らの手でゴシゴシと擦った。

そんな訳だから、美鈴の外見は簡素極まりなかった。申し訳程度に茶色く染めているものの、髪は飾り気のないシンプルなショートカットで、化粧もほとんどしない。いつも味気ないT

シャツとジーンズに身を纏い、夫と死別してからはほとんど女であることを忘れたといっているくらいだ。元々小柄でちんちくりんな体型的なこともあり、色気とは程遠く、言い寄ってくる男などいるわけもなかった。

そんな具合に、美鈴はある種典型的な母親としての人生だけを歩んでいたのだった。彼女自身もおおいにそれに納得していた。

「今日ねえ、次の試合のスタメン発表があるんだあ」

美鈴が早起きしてこしらえた朝ご飯を頬張りながら、わかばが少し不安そうな顔で言う。黒髪ロングヘアで、美少女といっても差し支えないくらいの秀でたビジュアルのわかばだったのが、可憐な見た目とは裏腹の、体育会系部活少女に育っていた。

「あら、そうなの。それは楽しみね」

「そんなことないよ…どうせ無理だもん」

青春の全てをソフトボールに捧げるわかばだが、残念ながら今まで一度もスタメンの座を射止めたことはない。

「そんなことないわよ。わかばちゃんいつも頑張ってるじゃない？ 次の試合はいよいよスタメンで出られるわよ」

「うーん…」

「お母さんは知ってるわ、わかばちゃんの頑張り。きつと、野球の神様だってちゃんと見ていてくれるはずよ」

「いや…ソフトボールだから」

「あ…だ、だから、とにかくそういう系統の球技の総合的な神様がいて見ていてくれるはずだから大丈夫だって。ね？」

「ふふ…もう……ありがとう、お母さん」

気がかりそうだったわかばの表情に笑みが差した。美鈴もそれを見て安心する。

美鈴は幸せだった。傍から見ても、貧しいと

はいうものの、とても幸せな家庭に見えるはずだ。この家庭も、このお母さんも素敵で、ここにはなんの問題もない。そう見える。

…外見上は。

※※※

フルタイムの事務仕事を終えた美鈴はスーパーに入店した。ここで夕食の材料等を買って帰る。ちなみに仕事中は会社規定の制服を着用して勤務しているが、出退勤時に更衣室で着替える決まりになっているので、今はいつものTシャツとジーンズ姿である。

このスーパーは全国展開している有名チェーン店とかではなく、地元の個人経営店といった感じの比較的小さなお店だった。とはいえ近

所では好評なのか店内はそれなりに賑わっている。事情があつて、美鈴は最近この店を利用するようになった…。

「……………」

店の入り口に積み上げられた買い物かごを右腕にかけ、美鈴は店内を進んでいく。その表情に、わずかながらなにか緊迫した色が差していた。夕食の買い物中のお母さんにしては、どこか違和感がある…。

惣菜や、野菜や牛乳が、無造作にかごに入れられていく。普通の買い物の光景だ。だが、少し奥まったところにあるお菓子コーナーに辿り着いた美鈴は、陳列された小さなチューインガムを、店に用意された買い物かごではなく、買い物かごと同じ腕にかけた、自らの私物である大きめのトートバッグの中に、スルリと入れた。とても自然な手付きで。

「……………」

美鈴の顔は能面のように一つも動かない。その後も犯行は続いた。ある商品は買い物かごにちゃんと入れ、ある商品は至ってなんでもない様子で自分のトートバッグに器用に入れた。決して目立たない滑らかかつ大胆な動作だった。そして一つの商品に留まらず平気でどんどん連続して行うところに、その常習性とこの行為への病的な執着のような黒いものを窺わせた。

意図せず、美鈴は生理用品のコーナーに足を踏み入れた。ナプキン等がズラリと並んでいた。その一角で、肩身が狭そうに並んでいるあるものが、美鈴の目を奪った。

（…へえ…こんなスーパーでも売ってるんだ…ゴクツ）

それをトートバッグに入れたいという明確な欲求が、美鈴の中に芽生えた。それが欲しいからではない。『それを万引きしてしまう体験』が、欲しいのだ…。

「……」

難なく、美鈴はそれを成し遂げた。そして店内を歩きながら何気ない仕草でトートバッグのファスナーを閉めた。買い物かごをレジに持っていく。ジーンズのポケットから財布を出す。普通に精算がなされ、商品をレジ袋に詰めて、店を出る。何事もなく、脱出に成功する。その瞬間、下半身全体に甘い痺れが走る。美鈴が欲していた、欲してやまないものだった。

(……あはは…楽勝楽勝♪…いえくくい☆)
母親にあるまじき退廃的な心境で、いまだビリビリ震える下半身に苦心しつつ歩き出す。気を緩めた、その時だった。

後ろから、強い力で肩を掴まれた。

「!!!!」

ドキツとする。正に崖下に突き落とされたような。そして美鈴は、死の宣告を聞いた。

「…お客さん、レジ通してない商品ありますよ

ね」

「い：いえ：あ：ありません」

一応否定するが、時既に遅し。

「：とりあえずお話したいんで、事務所まで来て頂けますか」

※※※

「：本当に申し訳ありません」

パイプ椅子に座らされた美鈴の目の前の机に、数種の商品が並んでいた。言い訳のしようもなかった。美鈴のトートバッグから、確実にこれらが出てきたのだから。

「……………」

店員なのか、店員に扮した万引きGメンというやつなのかわからないが、その若い男性は名

前等を確認しただけで特になにも言わなかった。だが勿論、これで放免されるわけなどない。しばらく無言で待っていると、責任者と思しき中年の男が現れ、その若い男性と交代した。小さな事務所内は男と美鈴の二人だけになる。

恐らくは店長だろう。ややだらしない体つきの、どこか不潔そうな強面のその男性は、机を挟んだ美鈴の向かい側の椅子に腰を下ろすと、とても高圧的な口調で言った。

「…全く…なんてことしてくれるんだよ！ふざけたことしてんじゃねえぞ、マジで！おいこらっ！」

「はっ…す…すみません」

「すみませんじゃねえよ！俺達がこれ売るためにどれだけ毎日頑張って働いてると思ってるんだよ！その利益をなに横取りしようとしてんだよお前は！わかってんのか！ああっ！」

「く…すみません…本当にすみません…」

それだけのことをしたのだから、当然怒鳴られるとは思っていた。けれど想定以上の男の威圧感に、美鈴は思わず面食らってしまふ。小さく縮こまり、俯いて震える。

「とにかく、警察に連絡だな」

その言葉に美鈴は顔を上げる。

「はあ！すみません！それだけは許してください！お願いです！それだけは堪忍してください！」

「そんなの通るわけねえだろ！今から電話するから！警察に突き出してやる！」

「ああっ！それだけは！どうかそれだけは！お願いですお願いです！この通りですから！どうか許してください！」

美鈴は飛び跳ねるようにして椅子から立ち上がり、そしてその場で土下座をした。痛いくらいに事務所の床に額を打ちつける。無茶なことを言っているのは承知している。子供が駄々

をこねているのと同じだ。だがこうせずにはいられなかった。

「…名前は…神里…美鈴…か…お前、結婚してんのかよ？」

少し沈んだトーンで、名前を記した紙を見た男が頭上から訊いてきた。

「主人は…三年前に亡くなりました」

「じゃあ子供は？」

「娘が…一人います…。娘と…二人暮らしです」
苦しい母子家庭だから、大目に見てもらえるかもしれない。現金にもそんな下心が頭をもたげた。が。

「娘いんのになに万引きなんかしてんだよ、てめえは！母親のくせに！ゴミクソが！人間のクズかよ！ええっ！」

「ひい…」

男はさらに激しく怒りを撒き散らしたのだ。当然のことだった…。

「つたく…っっていうかなに盗んだんだよ…はあ！」

土下座したままの美鈴の頭上で、机の上の彼女が万引きした商品に男が目をやる。チューインガムや乾電池などの、万引きしやすい小さな商品が並んでいる。そして驚きの声をあげる。妥当な反応といえた。なにがそんな頓狂なリアクションを引き出したのか、当の美鈴が一番わかっていた…。

「おいおいババア！お前なに母子家庭のお母さんのくせにコンドームなんて万引きしてんだよ！変態かよ！おい！」

「……………」

土下座する美鈴は、蛸のように赤面する。生理用品のコーナーで偶然見つけたそれを、美鈴は万引きせずにはいられなかった。性の象徴たるその商品を万引きすることに、単なる窃盗以上のある性的な興奮が付随していたことを、そ

して美鈴自身が自覚してそれを望んだことを、
到底否定出来ない。

「マジかよ…おい…こいつドスケベお母さん
かよ…娘いんのに…彼氏とパコパコ活動に励
むためにコンドーム万引きしたのかよ…え
え？」

小さく体を丸めた弱き母親に浴びせられる
容赦なき罵倒。全くの外れな指摘だった。そし
てその声に単なる怒り以外のある野卑な響き
が混じり始めたのを、美鈴は聞き逃さなかった
…。

「ひひ…やっべえ…まあとにかく…警察に電
話するわな」

再度の宣告に、美鈴はやはり懇願する。

「ああ！お願いしますお願いします！後生で
すから！どうかそれだけは！」

警察を呼ばれ、逮捕されたら、仕事も失うだ
ろう。自分も娘も、そうなってはおしまいなの

だ。だから、難しいとわかっていても、懇願する以外にない。

「お願いします！本当にお願ひします！ああ…もうなんでも！なんでもしますから！警察にだけはどうか言わないでください！それ以外のことならなんでもしますから！」

すると男は、その言葉を待っていたかのように。

「…ふふ…本当になんでもすんのか……お母さん？」

恐る恐る、美鈴は顔を上げる。そしてゾクリとする。無精髭を生やした下品な見た目の中年男が、露骨に性的な視線を、こちらに向けていたのだ。

「くく…そうだよな…警察に言われちゃまずいし…娘にコンドーム盗んだことバレちゃあ、もうおしまいだもんな！一生口聞いてもらえないだろうし！はは！」

その言葉を、痛みと共に美鈴も納得する。

「……本当になんでもするんだな、ババア？」

「……はい……なんでも……致します」

改めてなされた男の問いに、美鈴は決意を込めてそう答えた。もう、そう答えるしかなかった。

男は言った。

「ひひ……じゃあいぜ……警察には黙ってる代わりに……お母さんを……ドスケベ調教させてもらおうか」

「!!!!」

男は立ち上がり、事務所のドアに鍵をかけた……。